

満州開拓花嫁

新潟県 石井フヂ

広野落陽

満州国三江省樺川^{かせんけん}県^{いんやまか}弥栄村西弥栄三分屯。満州開拓花嫁と称され、石井儀三郎に嫁いで三年目の昭和十四年九月、義兄石井信一郎の家から分かれ、この地に移り住むことになった。弥栄は一次移民、その縁故者が西弥栄、紀原、千代栄、清栄と、各自の生活の場を移し独立したのだった。

西弥栄は一本の道に沿って一分屯から四分屯まであり、距離をおいて並んでいた。三分屯は新潟出身者が入り、土塀に囲まれた中にこれも土でできた家が六棟、一棟に二世帯となっていて、入居は十世帯、二世帯分は空いていた。隣の部落までは二キロはあったであろうか。所々に耕地はあったが、ほとんどが原野で地平線に赤く沈んでいく夕陽は、とても美しく雄大であっ

た。長く厳しい冬が明けるとあらゆる花々が一斉に開き、人々の心に潤いを与えてくれた。あやめ、芍薬、桔梗、おみなえしなどなど。ここでの生活は多少の不便はあったが、三分屯前二キロぐらいの所に現地人の部落があり、その人たちが開拓民の小作人で家畜の世話から耕作まで手伝ってくれ、そして作物も良くできたので、生活するには楽であった。お正月になると小作人の家庭に招待され、饅頭や餃子でもてなしてくれた。そこには身内同然の付き合いがあった。

昭和十二年に長女義子、十五年に次女洋子、十八年に三女政子、二十年四月に四女玉代を出産、女の子ばかりの四人の母となり、子育てに忙しくはあったが、主人も子煩悩で風呂へは自分で子供たちを入れないと気が済まぬ人だった。散髪もするし、下駄までも作ってくれる。雨が降ると義子を学校へ迎えに行ったり、とても子供をかわいがった。私はそんな主人に頼り切っていたので苦労はなかったが、冬の寒さだけは厳しくて身にこたえた。

昭和二十年に入ると、のどかな暮らしの中にも赤紙

と呼ばれる召集令状が人々の心をかき乱した。主人にもとうとうその日がきた。子供たちに別れを告げ、おそらく後ろ髪を引かれる思いで立って行ったに違いない。八月には十家族の戸主は一人もいなくなってしまう。電気が無くラジオも聞けないので、国の緊迫している情勢など知る由もない。夫の出征後の留守家族は幼子と若妻だけ。皆、途方にくれるばかりでした。

八月十二日、朝食の用意ができ、何気なく窓から丘の方に目をやると、白馬に乗った人がこっちの方に向かって走ってくる。その馬はやがて私の家の前に止まり、降りてきた人は現地の役人で、いきなり今日十二時までに三、四日の食糧を持って八虎力駅に集合するようにと、言い残して去って行った。当時、主人が部落長を勤めていたので、私の家にきたのであろう。私はそのことを伝えるため屯の中を走り、その足で小作人の部落に行つて、三分屯みんなの荷造りを手伝ってくれるように頼み、馬車できてもらった。小作人の奥さんは纏足のため、この家にはあまりきたことはない人だったが、ただならぬことと思つたのか、一緒にき

て、女らしい気遣いをしながら、荷物を整え子供の身仕度も手伝つてくれた。

何を持って行つたらいいものか、ただ迷いオロオロするばかりの私は、この夫婦に支えられ、駅に向かう外は曇つていた空は雨になり、馬車はぬかるみながらも駅にたどり着いた。道々、小作人は「畑は俺に任せとおけ。財産はきつと守つてやる。必ず帰ってくるよ」と涙ながらに何回も言う。私もすぐに帰れると思つていたので、留守を頼んで別れた。

八虎力駅はもう人と荷物で埋めつくされ、人々は雨に濡れながら青ざめた顔をひきつらせて佇んでいた。私は体中に鳥肌がたつるを感じながら、何かは分からないが、ただならぬ事態を読めた気がした。夕暮れになりようやくホームに入ってきた汽車は、屋根まで人でいっぱいだった。でもこの駅で待っている人の分は確保してあつたのか、乗れるには乗れたが、車内は身動きできない。外で私たちの後を追ってきた犬が、悲しそうに泣いている。この犬も私たちが西弥栄に移つたときから一緒だったので、中に入れてやりたかつた

が、それは許されない。その声は今も私の耳に残っている。

汽車は発車したものの、隣駅で止まり、なぜかそこで降ろされてしまった。仕方なく暗闇の中で夜明けを待つのだが、子供は疲れて地べたに寝てしまう。雨は止んでいた。翌日は晴れた良い天気になった。私たちの乗ったのは無蓋貨車だが、昨夜の線路を戻る。外を見ていたら、日本人の住宅から家財道具を運び出すようにしている現地人の姿が見えた。昨日出た我が家もそうなのかと思ったら、涙がとめどなく流れて仕方がない。どうなったのか、この世の中はどうなってしまうんだろう。戦争の状況なんて知らされていない私たちには、そんな思いが駆け巡るだけだった。後で考えてみると、これからが私たちがこの先通る地獄の入口ではなかったのかと思う。

私たちの乗せられた貨車は、日が照れば暑く雨が降れば田んぼのように水がたまり、子供の排泄物もまじって汚れはひどくなるばかり。食べ物も残り少なくなってくるので心細い。運転するのは日本人ではないらしい

いが、乗っている者の苦勞など知ってか知らずか、それとも故意なのか、本当に気紛れで駅でもないところにやたらと止まる。野原に止まったので降りて用を足していると、急に動き出すこともある。私のように赤ん坊をかかえている者はオシメにも困った。持ってきた数にも限りがあり、洗濯もできず、雨にぬらしてしまったり、本当に大変でした。

佳木斯駅ヂモシに着いたら、駅の周辺は至る所に火の手があがっているのが見えた。ホームにいた日本兵が、酒保から持ち出した物だと言って、砂糖や乾パン、缶詰類を車内に投げ入れて、私たちに元気でいるようにと励まし、その言葉は自分たちの家族に向けて送っているようでもあった。この列車が松花江を渡り終えたら、鉄橋を爆破すると言っていたので、振り返ってみると、物すごい炎が見えた。やはりあの話は本当だったのか、ソ連軍の追っ手を阻むためだそうだが。

綏化飛行場格納庫スヰカ

無蓋者から降り、各自荷物を背負い、子供の手を引いて行列をなして歩く。私も背負った荷物の上に政子

を乗せ、義子には玉代を背負わせ、洋子にはお天気も良く暑い日なのに、着れるだけ身に着けさせ、皆と一緒に歩いた。そして生まれて初めて見る幾種もの格納庫。私たちの非難所は日本軍の飛行機格納庫だった。大勢の人でごった返していた。一日先に着いた弥栄の人たちと一緒に暮らすことになる。この中での生活は風雨にさらされることはないが、コンクリートの上にシートを一枚敷いただけでは、夜のくるのが不安になり恐ろしい。持ち合わせの物を何とか工面しても北満の夜は冷える。

夜になると、広い庫内のあちこちにローソクの明かりが灯る。数は日ごとに増えていった。それはお弔いの明かりであった。幼子や体の弱っている人が命を奪われる。母親が授乳したままの姿で息を引きとり、子供はそれとも知らず一生懸命に乳を吸っている。周りの人は、手を差し延べてやる気力もないものだから、気の毒とは思いつながら、見てみぬ振りをする。私も心労と栄養不足で乳が出なくなってきた。玉代のまるまると太っていた体がだんだんやせ細っていくのが目

に見えて分かる。そんなときに麻疹が流行し、弱っているこの子の体にも容赦なく取りつく。声も出なくなつたのでシワシワの顔は泣いているのか、笑っているのか分からない。この子の命のあるうちは、できる限りのことはしてやりたいとは思うものの、持ち合わせのお金も無い。唯一の夜具でもある、義子の防寒外套を売ってお金を作ったものの、その夜から敷物が無く、風呂敷を敷いたが、そんなものでは寒さは防げず、子供たちはおもらしをするようになってしまった。

月も替わり九月に入ると、夜の寒さも我慢の限界となり、少しでも暖かい所で冬を越そうと、南下する団体が出てきた。一緒にいた弥栄の人たちも大連に向かってたつて行く。その中に主人の兄の家族もいた。一緒にいるときは何かと心強かったが、別れてしまうと、心の中に大きな穴でも開いたような気がするのだった。その家族にも、長男（正）九歳、次男（勉）六歳、（三男は生まれて間もなく死亡）、四男（勝利）二歳の三人の男の子を連れていた。皆無事でね、と心の中で祈る。

弥栄の人たちより何日か遅れて、西弥栄の団体も移動する日がきた。その支度をしている最中に、とうとう玉代が息を引きとってしまった。どうしたものかと思いつながら、取りあえずその子を義子に背負わせ、皆と一緒に夕暮れの道を、綏化の駅まで歩いた。歩きながら「玉代は息をしているよ。死んでいないよ。生きているよ」と義子が言いだす。私だって死んだとは思いたくない。主人の留守中に子供を死なせては申し訳ないという気持ちでいっばいだったから。綏化の駅からまた無蓋車に詰め込まれ、一息ついたとき、傍らの荷物の上に寝かせてあった玉代の手足が動くような気がしてしかたがない。ローソクや線香をあげてやることもできないまま、ハルビンの駅に停車している間に、団員の男の方に葬っていただいた。もうそのときの私は涙も出なかった。悲しくひどい別れであった。何にもあの子に手向けることのできない私にできることは、合掌することだけでした。

新京で越冬

満州の首都新京。ここへくるまでに何回となく、車

内でソ連兵や満人の強奪にあったが、命だけはとりとめた。風呂にも入れず、着の身着のまま、栄養不足のためと、恐怖とで目ばかりギョロリとした人々の姿は、異様に見えたであろうが、当時の新京はそんな難民でいっぱいであるから、私たちの存在に特別目を向ける人もいない。時運とでも言うのか、新京在住の人はそのままの生活を続けられて、うらやましく思ったのである。

私たちも新京に落ち着くことになり、南湖の近くにある学生寮に入った。木造二階建ての建物が三棟あり、そのうちの二棟が私たちの団体に当てられた。一階は物騒であるとのことで二階を使う。各室六畳、私は同屯の倉島さんの家族と一緒に、倉島さんは、御主人と奥さん、男の子一人と奥さんの妹の四人、私の家族と合わせて八人、どの部屋もそのぐらいの人数であったと思う。今日から畳の上で寝れると思うとうれしくなる。夜具はなくとも体を寄せ合って寝ると少しは暖かい。でも食料は何も無い。「洋子があっちのうちに帰ろう、あっちのうちで牛乳を飲もう」と言いだす。五

歳の子に戦争に負けたと話しても分かるはずがない。子供と一緒に私も泣きたくなる。西弥栄の家を出るとき、義子が「このうちも動いて一緒に行けたらいいね。そしたらこの中にあるものみんな持って行けるもの」と言った言葉を思い出す。本当にそれができたら、こんなに衣食に泣かされることはなかっただろうに。

新京にきて何日かして、私はとうとう起き上がれなくなってしまう。人より体は大きく、健康には自信があったはずなのに、どうしたことか。三人の子供のことを考えると寝てなどいられないと思うのだが、動けず涙がでるばかり。そんなところへ、千代栄の畠山さんの御主人が、バリカンを借りにきた（私は主人の大切にしていた品なので、荷物の中に入れて持ってきた）。私を見て気の毒に思ったのか「石井君は明日はきつと帰ってくるはずだから元気を出さない」と言ってバリカンを持って出て行った。

私はそんな言葉はあまり気にはしていなかったのだが、翌日の午後、部屋の外が何となく騒がしい。少しして私の部屋のドアが開き男の人が入ってきた。その

ころ、私は栄養失調のため目も悪くなっていたので、すぐに人の顔の見分けはつきにくかったし、やせ細った顔に不精ヒゲ、声で主人と分かり、昨日の今日であるから、これほど驚いたことはない。畠山さんも主人が帰ったと知りきてくれた。畠山さんも驚いたのであろうが、それを隠すかのように「俺の言ったとおりだろう。俺は嘘なんかつかないさ」と宮城訛みやぎまじのその言葉が温かかった。

主人は軍が解散し、自分に必要なものを持って行ってよいと聞き、新潟出身者で清栄に住んでいた布施完六さんと二人で、家族の後を追ったのだが、行方はつかめず、難民の姿を見ると、自分の家族と重なり、つい持っている食料を分けてやってしまったので、ここまで背にできた吠うなの中には、粟が少々入っているだけだった。汽車には乗れず、線路伝いに歩いてきたと言う。私は主人に玉代の死と財産を何にも持ち出せなかったことを詫わびた。主人は子供の顔を見てうなずいた。私は主人が帰ったので気が楽になったのか、日ごとくに元気になり、外へ働きにできるようにまでなった。

同室の倉島さんは、家族ぐるみで住み込みの働き口が見つかったのか、帰ってこない日が多くなっていた。

ソ連兵がめぼしい物を巻き上げにやってくる。部屋に押し入れられても出す物は無い。そのときは本当に生きた心地がしないとはこういうことかと思つた。また若い女の人を探し、所かまわず自分の欲望を満たそうとする。そんなのにつかまったら災難であるから顔に炭を塗ったり、坊主頭になつたりと必死であつた。

主人は体が弱つていたので働くことも思うにまかせず、私の従兄が新京に居ることを思い出し、主人に捜してもらつた。新京というだけで捜せるかと心配したが、夕方主人は従兄を連れてきたのにはびっくりした。従兄は私たちの様子を見て、ほうつてはおけないと思つたのか、すぐに私の家族を自宅に連れて帰り、風呂に入れさせ、米のごはんの食事をさせてくれ、その夜は布団で休ませてくれた。たとえ束の間であつても、この幸せは私たちに活力を与えてくれた。奥さんは私たちを気の毒に思い、やさしく氣遣つてくれた。こぼれんばかりの虱しよと垢で石炭のように黒く光る私たちの体

を、いやな顔もせず家の中に入れてくださった有り難さは忘れられない。二日ぐらいお世話になって、また寮の方に戻り、自活しなければということ、豆腐売りを始めた。朝まだ暗いうちに満人の店に行き、豆腐を仕入れ、それを背負つて日本人宅へ売りに行く。まあ何とか生活の足しになり、主食の高梁も買うことができた。

厳しい冬に身を慣らし昭和二十一年を迎えた。日向で暇さえあれば虱とり。その虱による発疹チフスが広まり始めた。私もその病気にかかり高熱が続ぎ、死の入口まで行つた。医者や薬もないのに元氣になれたなんて、不思議でさえある。この地へきてからも死者は多かつた。

暖かくなりかけたころ、鬼のようなソ連兵の姿を見かけなくなった。その代わりに八路軍の兵隊が多くなつてきた。あるとき、その軍の方からの通達で、しばらくの間外出しないように、と言うのであつた。寮から百メートルぐらいの所に大きな通りがあり、その中央に路面電車が走り、道を渡った向こうに広場、広場の

向こうに高等法院の大きな建物、法院の向こうに南湖があった。その広場で八路軍と国府軍の戦いが起きた。寮の窓からその様子が手にとるようによく見えたが、流れ弾が怖くて生きた心地はしなかった。三日ぐらい続いたのであろうか。寮の隣に官舎があり、その子供が戦いのあった広場から拾ってきたもので遊んでいたら、それがいきなり二階の窓から部屋に飛び込み、そこで破裂したとかで、若い娘さんが三人、手や足を吹き飛ばされ、むごい姿で地面に置かれていた。その人たちは意識はしっかりしていて「助けて、助けて」と泣いていた。とても悲しい出来事であった。

六月に入ったころ、主人がとうとう臥せってしまふ。体調は良くなかったが、その体にほかの病気が併発したのだろうか。団員の方が病院に入れてくださった。大きな病院に頼って集まるのか、患者で溢れんばかりである。満足な治療はとても望めるときではないが、先生の回診があるだけでも安心できた。でも快方には程遠く、手足の自由もままならない。看護婦さんに無理に動かされ、痛がる。主人の隣に二十歳にもならな

い青年が寝ていた。私が主人に食事を口に運んでやっているのと、それを見ていたのか、「おばさん少しでいいから僕にも食べさせて」と言うのだった。あまり多くはあげられないが、分けて口の中に入れてやると、とても喜んでいた。一人で渡満したものか、身内はどうなのかは知らないが、一人寂しそうに寝ている姿は気になった。

ある日、そのベッドが空いているので、どうしたのかとは思ったがほかのことに気をとられ、あとで、洗い場につながるその通路脇に、まるで不用品でも捨てるかのように床の上にかけているものに目がいくと、見てびっくり。それはあの青年の死体だった。この人にも肉親はいるであろう。その人たちの元へこの様子を伝えてくれる人はいるのであろうか、不憫でならなかった。

主人も何とか起き上がれるようになり、寮に帰る。そして六月も終わるころだったと思うが、いよいよ帰国できるらしいということで、証明書を作るため、そこに添付する写真を撮った。病氣上がりの主人の写真

は、痛々しく哀れでならなかった。ここを出る前にお世話になった従兄の家に行った。従兄はとても喜んで「内地で会おう」と言ってくれた。お金を少し都合していただき日本の土を踏むまでの支えとしました。毎日生と死の間の細くもろい糸をやりながら送った日々の足跡と、無念にもここで息を引きとられた人の亡骸を残して、私たちはこの新京を去った。

錦州へ向かう。乗り物は、やはり無蓋車。乗車する前からお腹の調子が悪く、便所通いをしていた主人は子供と別れて、特別の箱に乗せられ、私が付き添った。とても水をほしがり、キュウリが食べたいと言いが、与えてはいけないと言われていたので、どうしたらよいか迷った。苦しんでいるのに何もしてやることができないうのはつらい。そして心の中で助けてくださいと祈るばかりであった。だがその祈りさえもかなわず、主人は自分の分身の子供を私に預けて旅立ってしまった。私は三人の子供と、どう生きて行けばいいのか、だれを頼れと言うのかと叫んでみたかった。いくら叫んでも空しいばかりで、それは奈落の底に落とされた

私が、天を見つめている姿であったと思う。息がなければ、もうここにはおけない。伝染病であれば、なおさらのこと。野原で停車したので、布施さんが貨車から降ろして、窪地の所へ私の主人とほかに二人の遺体を置き、その上に草をのせてくれたという。穴を掘るにも道具が無い。いつ出発するか分からない停車では、これが精いっぱいであった。線香一本手向けることもなく、野晒しとなる三人に申し訳なく思いながら、動く列車に身を任せた。昭和二十一年七月二十日夜明け前。享年三十五歳でした。死因はコレラ。

錦州で乗船を待つ

錦州の難民収容所は、日本の軍営の中の厩うまばや。中央に通路があり、両側のコンクリートが傾斜しているのは馬の排泄物を流すためであろうと思う。またもやコンクリートの上の生活である。手足も自由に伸ばせないほど詰めこまれ、水分ばかりのような給食が配られる。船に乗るまでの我慢と皆自分に言いよかせる。

朝元氣そうに見えた人が夕方下痢に苦しみ、そして翌朝は死体置場に並べられている。これはコレラがも

たらした災いであった。どれほどの人が命を落としたであろうか。死体置場は出入口にあるため、見ないでは通れない。D D Tを全身にふきかけられ、粉まみれになって土間に転がっている、いつも十体以上はあったような気がする。野辺へ送る人も毎日大変だった。昨日置いてきた遺体の所に次の日行くと、その遺体がつけていた衣類は何もなく、だれもが丸裸。死体から剥ぎ取り、自分の身に付けていた人がいたようである（日本人ではない）。

学徒動員で渡満したのか、学生らしい青年も一緒に生活していた。その一人が「おばさん水をください」と言っていて弁当箱を差しただすが、生水は禁じられているので飲むことはできない。しばらくしてその人を見たら、弁当箱を持ったまま死んでいた。そんな光景は毎日であるから、明日は我が身かと震えてくる。コレラが治まらない限り乗船できない。時々検便が行われた。そのやり方は採便の係の人の顔のあたりのところ尻を出し、肛門に棒を入れて採るのであるが、長い間風呂に入っていないので、採る人も採られる人

もこんな嫌なことはなかったであろうが、乗船を目前にしていることであれば、文句も出ない。だれもが船に乗れたら、船にさえ乗れば、そう思って日を送ってきた。

いよいよその日がきたらしく、コロ島に向かう汽車に乗る。これがまた大変なことで、無蓋車よりもっと悪い。木材を運ぶ側面の無い台車である。もはやそのころの私たちは人間ではなく、動物以下の、木材のようなただの荷物に過ぎなかったであろう。台車上の大人は荷物と子供を中心に置き、自分たちの力で振り落とされぬようそれぞれの身を守った。

コロ島を後にして

コロ島の埠頭には、私たちの乗る船が停泊している。この船を皆待ちわびていたのだ。食べ物が無く空腹をかかえて寝たとき、病の床でうなされていたとき、冬の寒さで震えたとき、日向で虱をとりながらも、船に乗れる日ばかりを願っていた。今その念願かなって日本に向かつて動き出す。甲板に立った人々は離れていく大陸に目をやり、涙を流す人、声をあげて泣く人、

歌を歌う人、合掌する人、叫ぶ人、それはまさに十人十色、心の中に渦巻くものも十色であろう。私も主人や子供、同胞の屍を大陸に残して帰るのがつらくて泣いた。そして、ふと十年前の船上の思い出が頭を過ぎる。そのときの私も泣いていた。日本を離れるのがつらくて。それは昭和十一年のことである。

紫雲寺村（現在は町）稲荷岡の石井の家で、満州に行っている三男の嫁を捜している、という話を耳にした母は酒も飲まない、心のやさしい人というのが気に入ったらしく、私にその話を進めるのでした。母は父が酒乱で、家のことは顧みる人ではなかったもので、自分の娘だけはそんな苦勞はさせたくないと言う（そのころ父はもう他界していた）。母はきつと貧困の中から嫁に出すには、相手に不足もないなら、これが一番良いのかもしれないと思ったのであろう。私にすれば、一度も会ったことのない写真を一枚見せられただけ、それも私には考えられない満州へなんて行く気にはなれなかった。

仲介役の世話人の話では、石井の家の二男が一次移

民で渡満し、縁故者として弟を呼び、二男は昨年新築田から嫁を迎えたと言う。私が決め兼ねているうち、同村からもう一人久保田さんという人のお嫁さんが決まり、柏崎の方では後藤さんのお嫁さんも決まり、残るは石井だけ。私は母の進める話であればと思って受け入れた。その後も心は定まらず、夜、布団の中でどれほど泣いたことか。そうこうしているうちに出発の日がきた。

石井の父母と、私の母や姉に送られて、私と久保田さんのお嫁さんと世話人の三人で、新潟の県庁に向かった。県庁で後藤さんのお嫁さんと落ち合う。花嫁三人揃い、ほかの開拓団のお嫁さんと一緒に、県知事より祝の辞、日の丸の旗、餞別をいただく。私のような貧しい家の娘には、有り難くもったいないほどの送別であった。着物を着て、下駄をはいて満州開拓花嫁は旅立った。家を出て十日目だったと思うが牡丹江に着く。そこから軍の車に乗り、護衛のための兵士も同行して弥栄に着いた。

村公所に出迎えてくれた人が主人と違って、その人

の後について行くと、どうも違うようであり、その人は主人になる人の兄であった。婿さんは三人で佳木斯の方に出迎えに行ったとのことで、私たちが着いてしばらくしてから戻ってきたのである。揃ったところで、ようやく三組の形ばかりの式を済ませ、私は義兄の家に三人で向かった。義兄には長男が八月十九日に生まれ、土壁の家ではあったが、もはや揺るぎない家庭が築かれていた。すぐ私たちの後を追うように、久保田さんがきて、出掛けなければならぬ用があるので、嫁さんを預かってくれと言って出て行った。

すぐに迎えにくるものと思っていたら、三日過ぎてもこない。心配になり義兄がお嫁さんを連れて様子を見に行ったが、しばらくして義兄一人が戻ってきた。久保田さんは家にいたと言う。そして久保田さんの家は野中の一軒家であるからお嫁さんが気の毒で、どうしたら良いか考えていたとか、久保田さんの人柄を知っている人は、「久保田さんらしいなあ」と言って笑った。その後もこの人の武勇伝はいろいろとあり、生命が危ぶまれることさえあったが、土地の人からは「ヤ

ンタイジン」と呼ばれ親しまれていた。本当の開拓魂を持った人だったのであろう。

翌十二年の六月に長女出産。その喜びも束の間、私の母の訃報を聞く。私を送り出して一年にもならないのに、母はなぜそんなに急いで逝ってしまったのか、私の主人や子供に会うこともなく。このときも悲しく涙が止まらなかった。主人や義兄夫婦も、本当にやさしい人で、私も何とかこちらの生活にも慣れたころ、三分屯に移った。三分屯に根をおろして六年、こんなことになろうとは、神様も知らなかったのであろう。国の進めで二男、三男は新天地を求め、そこへ骨をうずめる覚悟で渡りはしたが、こんな形で骨になるとは情けない。どんな言葉を並べ涙を流し叫んでみても、命をなくした人はもう戻らない、と。

沈没した日本丸と共に異国で荒波にもまれた一年。華やかに送り出された満州開拓花嫁は今、千苦万難をくぐり抜け、生命ある者のみが祖国に向かう。

祖国とて安住の地とは程遠く、三人の幼子をかかえ、「無」からの出発はあまりにも厳しく、どう記したも

のか、私にはその術がないのです。子供と一緒に死んで楽になろう、と思つたことも度々でした。でも、いろいろな人々のお力に助けられ、今日八十二歳の年齢を重ねられたことは幸せだと思つております。

【執筆者の横顔】

筆者は新潟県新発田市において、大正三年六月九日生まれ、現在八十二歳です。兄弟は二男三女おり、三女。昭和十一年当時、重要国策として満蒙開拓を積極的に進めており、開拓も安定期に入り、花嫁募集も併せて進めておりました。当時二十二歳のフヂさんに石井儀三郎氏との結婚の話が持ち上がり、やさしい方で、酒を飲まないとのことに関引かれ決心、大勢の方々から祝福され渡満、西弥栄に入植、御主人と共に営農に取り組み生活も安定、四人の子供に恵まれ充実した生活を送っておられたのです。

昭和二十年六月、御主人は突然の応召。更に八月に入りソ連軍の不法な侵攻。諸般の状況から工藤村長の決断により、十三年にわたり宮々と築かれた弥栄村を

放棄のやむ無くに至り、直ちに引揚げ列車の手配をして管内各役員に緊急連絡。連絡を受けたフヂさんは直ちに部落の方々に伝え、引揚げ準備を急ぎ、使用人に別れを惜しみながら馬車で駅まで送っていただく。

無蓋車での引揚げ、綏化での集団避難生活、多くの犠牲者を出し、四女玉代ちゃんもその一人となる。この地での冬は越せないと判断した村長さんや幹部の方たちが温暖な奉天、新京方面への移動を占領軍に陳情、ようやく認められ、無蓋貨車で南下中、ソ連兵、満人による略奪に遭いながらの移動。新京着、思いがけないご主人との再会の喜びも束の間、苦勞が元で犠牲となる。フヂさん、子供さんたちの悲しみは、いかばかり、幾多の苦難の道を通り越え、昭和二十一年秋ようやく帰国の途に着く。

祖国にたどり着いたものの、三人の幼子を抱え、安住の地とてなく途方に暮れるばかりでした。フヂさんのお姉さんの嫁ぎ先でのお舅さんが見兼ねて敷地を少し貸してもよいので親戚の方々で家を建ててあげたらどうかと有り難い提案をいただく。親戚の方々もほうっ

ておくわけにもいかないと、四疊半二間の家ができた。井戸も風呂もない、電気もない、ランプ生活を十二年間続けられたようです。

野菜と果実の行商で生計を立て、朝の暗いうちから八キロも離れた新発田の街までリヤカーを引き、雨の降る日はミノを着て雪が積もればそりを引き、街の中心を売り歩き、初めのころは売れ残ったり、経済的に大変だったようだが、だんだんとお得意さんも多くなり、ようやく中古の家を買い、井戸も風呂も電気も灯る家に住むことができたのです。

五十歳を過ぎてから、バイクに乗っての行商、そんな姿を町政だよりに、戦後四十年と五十年の節目の二回にわたり載せていただき、「満州のカアちゃん」と呼ばれ親しまれ、街の有名なおばあちゃんとなったのです。

三人の娘さんたちも立派に育て上げられ、それぞれに結婚、昭和五十九年には娘さんたちと共に訪中団に参加、亡きご主人と末娘玉代ちゃんのお供養と犠牲になられた方々の霊を慰めてまいられました。

長女義子さんには、弥栄会の（会員四百戸）支部長として活躍をいただいております。

（弥栄会 満蒙開拓第一次移民団

副会長 廣谷 幸三郎）

満州第一次武装開拓団

弥栄村の追憶

長野県 小倉 幸男

はじめに

満州第一次武装開拓団は、満州移民が国策として是か否かを決定するための試験移民であるということで、団幹部以下団員それぞれが、匪賊の横行する中、万難を排し不撓不屈の開拓精神で弥栄村を立派に築き、国策是なりの答えを出したのである。私は弥栄村の生き残りの団員（八十六歳）として当時の記録を記した次第です。